

五無齋・保科百助先生の 「無垢なる教育的情熱」と「立科教育」

立科町教育相談員 岩上起美男

「(成果は)長い目で見るのが大切。(特色は)結果として、他と違う特色あるものになればと思っている。」

という小宮山和幸町長の議会答弁こそ、「立科教育」推進上の原点ではないでしょうか、と前号の「広報たてしな」で申し上げました。

教育の成果とは、一朝一夕にして示される数字や結果、目に見える現象だけで評価すべきではないからです。そして、教育の特色とは、推進する側の自己評価ではなく、教育にかかわる多くの方の誠実で、粘り強く、地道な実践に対する他者からの客観評価であるからです。

さらに、小宮山町長の見識を「立科教育」推進上の原点とするならば、「立科教育」の精神的な原点は、立科町出身の偉大な教育者、五無齋・保科百助先生(1868～1911)でありたい、と提言致しました。

なぜなら、人権文化の創始者と評される保科百助先生の「無垢なる教育的情熱」(井出孫六)は、今日においても、教育の根幹をなす姿勢であるからです。そして、保科百助先生生誕の地・立科町でも、若い世代を中心に、「立科町ゆかりの人で、名前は知っている。でも、何をした人かは知らない。」という方が存外多く、まことに残念に思われるからです。

そこで、保科百助先生を語るにはあまりにも浅学ですが、「釈迦に説法孔子に悟道」に陥ることをおそれず、あえて先生の足跡をご紹介致します。

保科百助先生は、きわめて多角的な才能と個性を遺憾なく発揮して、波瀾に満ちた44年の生涯を颯爽と駆け抜けました。

明治元年(1868)6月8日、山部村(現立科町山部)・保科丈左衛門の三男として誕生。

13歳にして、授業生(代用教員)として母校の山部小学校に奉職。

18歳のとき、長野師範学校に入学。

23歳で同校を卒業後、飯山小学校、東塩田小学校、本原小学校、武石小学校(2年目に校長就任)、大豆島小学校(校長)を歴任し、32歳で蓼科小学校校長兼蓼科農学校長(現蓼科高等学校)に就任。

その1年後、子どもの能力や個性、希望を存分に伸ばせなかった「教師としての自分」に対する自責の念を感じさせる、「人の子を賤いたる事少なからず甚だ恐縮の至りにつき」という辞表を提出して退職。

長野師範学校一期生の保科百助先生が、33歳で教職を辞した事情には諸説がありますが、現行の10年教職経験者対象の中堅教員研修制度と考え合わせますと、10

年間という限られた教師生活において、きわめて燃焼度の高い教育実践を重ねたことがうかがわれます。

教師を辞めた後、鉱物標本採集家として県下を漫遊し、採集した鉱物標本を、皇室に献納、パリ万国博覧会に出品、そして、県内各学校及び帝大に寄贈。

貧困のために中等教育を十分に受けられない青少年のために、長野市に「保科塾」を開設。

筆墨の行商。

信濃教育会付属図書館(現県立長野図書館)設立のために奔走し、自らも蔵書三千余冊を寄附。

週刊誌「信濃公論」の創刊。

衆議院議員補欠選挙に立候補し、落選。読売新聞連載の「日本百奇人」で第一位に当選。

講演、原稿執筆、「信毎」紙上に「通俗滑稽信州地質学の話」を連載、「信州産岩石礦物説明書」の出版、狂歌集「よいか、をほしな百助」の刊行、……。

明治44年(1911)6月7日、脳動脈栓塞のため、長野日赤病院にて逝去。行年44歳。

保科百助先生の命日にちなんで、立科小学校では、4日間にわたって日報で詳しく、先生の経歴と業績、そして、新し